

Title	史学者としての田中萃一郎先生
Sub Title	Suiichiro Tanaka as historian
Author	松本, 信広(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1973
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.45, No.4 (1973. 10) ,p.49(409)- 61(421)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19731000-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史学者としての田中萃一郎先生

松 本 信 広

丁度五十年前、アイヌ視察から帰って上野駅に下車した私は、づらっと駅にならんだ三田史学の同僚達の顔を見てどうしたのですかと聞いて初めて田中先生が、瀬波温泉で急死されたこと、その靈柩が今著いたことを知り、おどろきとかなしみとで茫然とした。先生が企図された泰西名著歴史叢書の中、その担当をされていたヘルデル「歴史哲学」の前巻の訳を終えられ、一家の人々と海と温泉とに恵まれた越後の瀬波で休養されようと大正十二年八月十二日到着、翌朝午前九時水泳中突然つめたい海水にはいられたことから脳溢血で不帰の客となられたのは先生実にまだ数え年五一才の若さであった。あらゆる方面で期待されていた先生が突如として逝去されたことはまことに誰もが哀惜措くあたわざる所であった。

先生は明治六年（一八七三）三月七日伊豆田方郡函南村（もと大竹村十三番地）で田中鳥雄という土地の名望家の長子として生れられた。父君は、明治二五年、廿七年の両度に衆議院議員として選出せられた政友会系の代議士である。漢学を修め「椎茸養成法」という著書あり、後県会議員にもなっている。

函南村というのは、丹那トンネルの出口にあたり、箱根外輪山鞍掛山の南に当る日金山、一に十国峠の西麓で、先生の号「金嶺」は此山に因んだと考えられる。先生は、小学校をおえ、明治十七年二月十八日三田の幼稚舎（当時幼年局とよばれる）に入学された。幼稚舎の生みの親であり、育英に尽された和田義郎氏は二五年一月十日に逝去されたが、その時

幼稚舎を既に卒業し、正科に進まれていた田中先生は、その私淑していた和田さんの訃を聞いて哀悼の念に堪えず、同志の人々と共に追悼の小冊子「涙の雫」を編集し、之に哀惜の情を披瀝した一文を掲載されている。

塾は明治廿三年に文・法・理財の三科に分れた大学を新設したが、先生はその第一回の学生であった。その当時の教師の中に東大に教鞭をとっていたルードリッヒ・リース氏が、万国史を教えに来られていた。同氏は、ドイツの著名な史学者で著述多く、ことに帰国後ベルリン大学の教授となり、ウエバーの万国史の大冊を改訂出版している。当時東大に於て教えを受けていた生徒の間から後年の史学の大家が輩出しているが、その中に幸田成友氏あり、奇しくも後に田中氏と三田史学の建設に協力された。お二人とも原典にあたれというきびしい実証主義の学者であったこともこのランケ史学の直系であったリース氏の薫陶に負うところ多かつたこととおもう。リース氏の使用する英語は可成難解であったが、当時クラス中最年少であった田中氏はリース氏の主として日本歴史に関する質問を一手に引き受け、その愛弟子であったとは同窓川合貞一博士の追懐される所である(三田評論昭和十五年一月五〇九号)。

明治廿五年十二月に卒業され、郷里に帰り、父君のもとにあって家事をたすけられたが、当時業をおえた子弟が帰郷して父母のもとにおり、地方のバックボーンとなる人多かつたことは鎌田栄吉氏に云わしめれば官途栄達を目標とする官学と対比して推重される三田の美風であったという。その当時氏は伊豆学校(後の韭山中学)の校長心得になったこともあったが、初めて登校した時、学生も教師も誰もいなかったので嫌気がさし、すぐ之をやめ、家居して読書に親まれたという。当時父君にすゝめられ「近古伊豆人物志」という小冊子を明治三十一年五月(一九〇一)に脩竹齋雑著の一として公刊された。氏はなほ進んで伊豆名勝志、近古人物志続篇を著す予定であったらしく、伊豆に関する書物の蒐集、謄写を其後も継続されている。

先生が故山に帰臥することをやめ、決然として上京せられたのは、二つの理由に基くらしい。一つは明治廿七、八年の

戦役と、其後につゞく三国干渉、列強の中国に於る勢力範囲の分割と極東の危急を告げる状勢は、先生をして史学者として世に訴えんとする思いを抱くに至らしめたのであり、また明治卅年狩野川の大洪水によって先生が畑中の梅の木によじ登り九死に一生を得たることは夫人の談によると先生をして一念発起、上京に決意せしめた直接の動機であったと云う。

氏は塾在学中より東洋近世の歴史を編述する希望をもち、帝国図書館や慶応義塾図書館（当時書館と云う）蔵書及び参謀本部の編纂物等を検索せられていたが、故郷に於て此資料を纏められ、その原稿をたづさえ、卅一年四月頃上京され、当時の著名な学者井上哲次郎に之を見せ、同氏を初め、那珂通世、鎌田栄吉の序文、副島種臣の題字を添えて「東邦近世史」上・下二卷（卅三年六月、卅五年十二月）として丸善より刊行された。本書は日露戦争前に於て東洋の諸国家の興亡の跡を叙し、国民に之を知らしめる使命を果した名著であつて極めて好評を博した。

「歴史は重に戦争と商業との記録なり」（再版岩波文庫本による）という書出しは、文化史の盛んになった今日吾々の意表をつくものがあるが、列強の帝国主義がアジア、大洋洲を席捲していた当時日本人として氏の如き史観を抱くことは無理ではなかったのではあるまいか？此本の巻尾に著者は「日本の地位の支那、韓、暹羅等と大に異なるを喜ぶ」と共に得意の極日本をして知らず知らず、開国進取の維新の国是を忘却する傾向のあるのを憂えている。即ち氏は当時の「和魂漢才」を標榜し、技術だけ西洋より学び、精神はもとのまゝという、保守主義の台頭を憂えていたのである。

田中先生の塾における仕事は、明治卅二年の普通部の教師をもつて始まったが、その広い読書力、倦むを知らない研鑽は、学生達の信頼と思慕とをあつめていた。その当時の田中先生の風貌については小泉信三氏が感想を記されている。

（三田評論、前引）即ち氏が明治三十五年高等小学校から塾の普通部二年に転校された時日本歴史を受持つ白面の書生という感じのする教師が田中さんであった。小泉氏の隣りにいたやゝ不良じみた一学生は、その耳に私語して「この人は出来るぞ」といったという。その講義振は、何の飾り気も抑揚もなく非常な早口で一時間立て続けにしゃべられた。

教科書の中に家康が伏見の城で老臣鳥居等と別れを惜しむ一節があつて「白首の主従相擁して流涕云々」という文句が書かれてあつたが、「それをシロクビと読んではいけません」と先生は云はれ、むろん顔の筋一つを動かさなかつたと云う。今の学生諸君にはその意味はわからないと思うが其頃増上寺の大門のそばの神明にも愛宕山の下にも矢場があつてシロクビ又はシラクビと云えばそういう所の私娼を指す言葉であつた。小泉さんは田中先生を記念する催しの際よく此逸話を回顧せられたがその当時の田中さんの風貌躍如たるものがある。

明治三十七年には慶応義塾の名に於て「独立自由統大国民」という訳著を刊行されている。塾は、これより先「独立自由大国民」という訳著を公刊し、ルプレの学統をつぐデウモランの著「アングロサクソン優秀論」を紹介したが田中氏はそれについて、彼の「権勢を掌握するは有利なりや」*A-ton intérêt à s'emparer du pouvoir?* を訳している。序文に鎌田塾長が云われるように本書は仏人が権力を掌握せんとして自己の自主を失うも之を意となさざるに反し、英人が自由を享有することを喜んで敢て権勢を貪らざることを強調したものであり、民主々義を第一義としている慶応義塾の精神を弘く宣伝する意図をもって刊行されたものであらう。

明治卅八年に先生は慶応義塾留学生として史学研究のため歐洲に留学を命ぜられている。ロンドンにおいては大英博物館、印度省等の資料を調査し、主としてゴルドン將軍のあつめた太平天国文書、その外歐洲におけるオリエンタリズム（東洋学）沿革の資料を謄写しており、ドイツに於てはライプツヒヒにドイツ史学者として著名なランブレヒト教授につき史学研究法その他を学ぶ所あつた。四〇年春帰朝され、たゞちに大学部で史学を担任された。

日本における東洋史の開祖と云つてよい那珂通世は福沢塾に学んだ一人である。彼の「成吉思汗実録」は、我国における蒙古史研究の礎を築いているが、田中先生もその意図をつぎ、四十二年にドーソンの「蒙古史」の訳述を刊行した。ドーン *Constantin Mouradja d'Ohsson* は、アルメニア人の出であり、一七八〇年頃生れ、一八五五年に没している

が、コンスタンチノープルで外交官として在勤している傍、アラビア、ペルシア、トルコ等の多くの史料を渉獵して蒙古史を著わし、ヨーロッパにおける蒙古史中の随一と目されていた。第一巻はジンギス汗の事蹟を、第二巻に、元朝の歴史を第三、四巻にイル汗国史を取扱っている。先生の生前に刊行されたのは第一巻だけであったが、その流暢な訳文は読者を魅了し、好評噴々たるものがあつた。第二巻の原稿は、先生の歿後、昭和八年に、十年忌を記念し、第一巻とあわせ、三田史学会より刊行された。第三、四巻は未完成に終つていた。(今日その全訳が佐口透氏によって企図されているがまだ完成しない。)

四三年に文科が改組せられ、英文・哲学・史学の三分科が設けられたが、史学科の開設は田中氏の努力に負う所大であつたのである(氏の当時の日記による)。「ドーソン蒙古史」の著者の肩書に講師とあるが恐らくこの史学科創設の際教授と昇格されたのであろう(当初塾では一般に教員と称し、講師、教授などの区別が明かでなくその記録が残っていない)。

先生は史学を研究せられるにあたり、まづその研究法に著目せられている。氏は在来学生のやっていた「三田評論」を改組し、學術雜誌「三田学会雜誌」を發刊し(明治四十二年)その第一号を自ら編輯したが、その号及び二、三号に互り「エミルライヒ氏の史学研究法」を發表し、ハンガリア生れで英国に於て名を馳せた此史家の心理的といわれる研究法を紹介している。これより先氏は三十三年慶応義塾學報に「劉知幾の歴史研究法」を論じ、唐代に於て歴史に就て並ならぬ識見を示した彼の「史通」を詳細に分析し、世界における歴史研究法の著述中まっさきに位するものと推奨している。またつゞいて三十四年の慶応義塾學報に「王鳴盛の史学」において此学者の考証を重んずる史風を紹介している。

大正二年東京市主催慶応義塾講演集に掲載されている「史学の性質及任務」は簡明に先生の史観を述べている。即ち先生は、歴史が無ければ政治に根がない、又政治が無ければ歴史に果実が無い、即ち歴史と政治とは相俟って行くものであるというシーレーの説をひき、歴史は繰返すと云うことは即ち歴史には法則があると云うことを極く平凡に言ったもので

ある。史学の考証ということは必要であるが、あまりこまかいことばかり研究していると世間の人が興味を感じない、史学は死学となって詰らぬものであるという批難をうける。私の見る所に依ると即ち人類の進化の大法を研究してその間に法則を認めて行くという考えを以て研究して行くことが最も必要であろうと思う云々と歴史に法則を求めようとした当時のランブレヒト史学などの行き方と近いものがあった。先生は歴史の事象は繁多であり、何等かの統一概念をもって系統化してゆくことの必要を説き、その中でも国家の重要性を強調した。

曰く「国家を主として人事の変遷を研究してゆくのが史学の本分である。その結果史学の法則を知ることができ、それが新なる意味の実用的史学である、歴史は叙述的から実用的となり、更に科学的となって依然として実用的のものである。さいごに史学は過去の人事の研究で主観的に云う歴史はこの研究の結果を時間的継続の關係に重きを置きつゝ記述するものであるから歴史は一つの科学であつて又一つの芸術である云々」

先生の史学研究法の講義は、極めて精彩あるもので感銘深かったが、史学の研究に独創的な精神が必要があるので、史家は文芸的作品を読む必要があると平素云われていたことを想起する。また歴史上の名著を絶えず読むことを奨励され、昼の休みには自から学生の為に名著の講読をされていた。先生の記文の明快流暢なものも由来ありと云わねばならぬ。

研究法の講義に於て種々な歴史補助科学の部分はことに私共に教える所多かつた。先生はとりわけ地理学の重要性を説き、学期試験に歴史と地理との關係を述べよと出題せられたのに対し、私が、当時のリッケルトなどの歴史は一回限りの事象を取扱い、法則的科学に非ずと主張していたのかぶれ、先生の意図と正反対の答案を書いた憶い出も今日に於て冷汗ものである。

先生がヨーロッパに於て手写した古文書を駆使し、明治四十五年東大史学会で「太平天国の革命的意義」を論じ、叛乱軍の真に革命的であつた点は、その教理と曆との二つだけであり、それも純粹に西洋のものを採用せず、甚しく之を改竄

し、西洋の文物をそのまま採用していかないということを論じ、最後に当時の政治状況にふれ、中国の辛亥革命が西洋流のレヴォリュューションと比べて前途遼遠であり、中国人の尊大心、保守的精神のつよいことにさまたげられていると論じておる。先生の史論は、たえず現代を意識しており、歴史家であると共に政治学者でもあらんとしたその面目を發揮している。

東洋学報大正七年、八年にかけ発表された「支那学の沿革」も亦外遊中に採訪した資料によっている。ヨーロッパにおけるオリエンタリズムの歴史は氏によって十七世紀より十九世紀前半まで精彩に跡づけられ、当時の学者の相互関係、その性格、優劣にまで及んでおり、氏の会心作の一つであったと云える。

これより先大正四年史学雑誌に発表した「元の官吏登庸法に就いて」は、氏の蒙古史研究の所産であり、この中にポウチエ、ユールなど西方学者がフビライの枢密副使博羅がマルコ・ポロであると断ずる通説を訂正したり、元朝の官吏登庸法が決して完全とは評しがたいが、そのシナ本部を失った主要原因を之が欠点に求めんとするは不可なりと論ずるなど、蒙古史研究に寄与するところ多かつた。

氏は最初主に塾の図書館の架蔵本によって研究せられていたが（塾は最初原書を備え付け学生に購読せしむる組織であり、塾の図書を利用することは当時の塾の風でもあったらしい）図書館を管理していたS氏が田中氏が図書館に本を買わせて困ると苦情を云われたので不快を感じ、爾後自ら史籍を購入せられるようになった。（夫人の談による）此点に於て当時たまたま丹那トンネルが着工され、氏所有の田畑が買収されたことなどが先生の図書蒐集の資金源の一つに役立ったことと考えられる。先生の蔵書は多岐に亘り、数多く、歿後その大部分が本塾図書館にゆづられ、田中文庫と云われているが、その冊数一万三千七百六十冊（中洋書一八六六冊、和書二八九四冊）に達する。先生は単に之を蒐集されたのみならず、之をよく読まれた。和漢洋に亘っているが、恐らく将来それに基いて著述研究を志したと思われる、或種目について特に蒐集の多いこと

が注意される。たとえば先生の通俗道教に関する研究としては先生の台湾旅行の産物として三田評論大正五年十月号に「媽祖」の一篇が目にとまる位であるが、通俗道教のバイブルと云われる「太上感應篇」や明の袁了凡の「陰騭録」の如き多種多様の出版物、ことに後者の如き我国における版本、訓読、絵入の類まであつめておるのは、恐らくこの種の本が民衆の信仰を理解する貴重な資料であることを認め、他日編まんとした清朝近世史を社会思想の面よりみる準備として蒐集されたのではあるまいか？（幸田成友「故田中教授を憶ふ」三田評論大正十二年十二月号三二六号参照）

学和漢洋に亘り、歐米の史籍に通暁したと共に漢籍の造詣深かったことは先生の学問の特色であり、その「支那学問研究法上の一特色『雪橋詩話』を讀みて」（東亜經濟研究、五卷一号大正十年）に於て此清末端方の値遇をうけ、江寧知府たり、辛亥革命後上海にあった揚鍾羲の著述を論評した一篇の如き、氏の学殖の深さをもつて世人を讚嘆せしめている。羅振玉は此「雪橋詩話」は、學術文芸を初め、朝議制度、有職故実、百般のことに涉つて清代の野史であると評したが、先生は詩話と題して一代の故実を伝へる中国学者の学問研究の方法をもつてヨーロッパの學術と比べて遜色あることは認めるが専門家に成らねば学問の研究は出来ぬというわけはないとフレーザーなどの例をあげ、史学就中修史学は鑑賞的記述であつて、史学の上に於て科学的研究の結果を韻語を以て表現せんとするシナ学問研究研究法上の一特色に就て三度思を致す必要があると注目すべき發言をなしている。揚鍾羲は、戦時中満洲皇帝に扈從し来日したが、橋本増吉氏の請に応じ、二篇額を残し、今本塾東洋史研究室に蔵されている。

「汪竜莊遺書を讀む」（三田学界雜誌七卷七号大正八年）に於ても、先生はこの浙東史学の流を汲み、「史姓韻編」「元史本証」等の著ある汪輝祖の忠誠篤実な人格、地方官として経歴、その著書を紹介すると共に当時の中産階級の生活、物価の騰貴、流通貨幣の状態等に関する資料等を抄出している。此著者が「太上感應篇」、「陰騭録」の忠実な信奉者であつたことを特筆していることも当時の中産人士の処世訓の何たるやも示すものとして興味深い。

先生の蔵書中に古銭に関するものが多いが、その論文としては早く「古泉研究の沿革」（慶応義塾学報明治三十八年三月）あり、其後中国に於けるメキシコドルの流布を論じた「墨銀考」（三田学会雑誌、大正四年、同補遺、同大正五年）がある。後者中に、氏は明治元年香港の造幣機械をグラバーをして日本に送らせ、之が焼失したことを、しかし我國の「円」という称呼が香港円銀の模倣なることを指摘し、また後に「汪竜莊遺書」により此「円銀」が乾隆嘉慶の頃中国人の間に行われていたことなどを指摘している。

中国に於ては国家組織よりも家族制度の方が発達しているが、その古代の家族制度は次第に崩壊していった。しかし之に反対して宗族が結合しようという傾向もあり、宋の范文正公が義田を置いて一族中の貧者を救わんとし、その家法盛衰があったが現代に及んだが田中先生は「義莊の研究」（三田学会雑誌十一卷十二号大正六年）に此制度に就ての資料をあつめ、最後にかゝる制度は勿論一般に行うべきではなからうが滔々たる個人主義を緩和するため研究の価があるとしている。

こういう先生の研究傾向をみても、近世中国の社会経済に関する問題に興味を抱かれていたことが窺われ、先生が長寿を全うせられたなら定めし、その当時としては新奇な角度から編まれた中国近世史の実現がみられたことと残念に堪えぬ。

田中先生によって創設された三田史学科は、いろいろ新しい試みがなされている。自分の在学したのは大正六年より九年までの間であるが、当時東洋史には先生の外に橋本増吉、加藤繁、西洋史には占部百太郎、阿部秀助、国史には幸田成友、川上多助、松本重彦の諸氏、何れも当時一流の小壮学者を主体とした陣容であったが、古文書学として設立当初より伊木寿一氏が聘され、また歴史哲学を船田三郎氏が担任していられたが、後者は、我国大学に初めて設けられた科目として特筆大書さるべきものである。史学研究法は田中氏自らその任に当られたが、民族心理学を川合貞一氏が講じられたのもまた其頃異彩を放つものであった。その外地理を受持たされた阿部秀助氏は、リース氏の女婿であり、当初塾の予科で地理を講ぜられ、後経済史に転じ、塾留学生としてドイツに留学した。（阿部氏の後に地理学を予科で講ずるため、東洋史の橋

本増吉氏が赴任されたのである)

田中先生はなほ史学科の充実を企図されており、自分の本科進学当時にか新設科目の希望はないかと質問され、人類学をという自分の希望をいれ、移川子之蔵氏が講師として依頼されたのである。氏は福島県の出身でアメリカのディクソン教授についた新進人類学者であり、後年台北帝大の人種土俗学の教授となっている。塾に推薦されたのは同郷の池田成彬氏であつたらしい。

先生は史学科の運営を主宰されたのみならず、隔週一回研究会を開き、教師・学生一人づゝ研究を発表し、互いに切磋琢磨した。此研究会は殊に幸田氏のユーモアに富んだ座談が一座を笑わせ、その当日が待たれる程であつた。また春秋の三田史学会旅行も伊木さんを中心として各地の古文書を採訪研究する主目的を持って行っているものであつたが田中さん始め先生の参加によって興味深く会員達の親交を深めるに功献した。先生はよくドイツでランプレヒト教授が学生と一緒に旅行することを語られたが、此旅行或は範を之にならつたものかも知れない。当時塾からあらかじめ鎌田塾長名で各地関係の筋に便宜供与を依頼するので、なかには塾長自らが来るのかと勘ちがいし、小学生を整列させて迎えたり、接客業の女性をわざわざ御給仕に呼んだりした所があつた。また或所では若い伊木さんが古文書解読の衝に当り、他の田中、幸田などの長老も学生と交つて之を謹聴しているので、土地の人が私語し、「あの人は一体何だろう」「あれは多分卒業生だろう」といったのを聞いて爾後「卒業生」が先生方の代名詞となつた笑い話もある。

吾々より一年先輩の松本芳夫君が、津田左右吉さんの説を批判した卒業論文「神代史の研究」が、大変面白かつたので田中さんは今の東門の角にあつた書肆国文堂に大正九年「三田史学叢書」第一編として出版させた。つゞいて三田史学会の機関紙を発刊しようという気運がたかまり、大正十年三月同志相集まり「史学」を発刊することになった。此時田中さんは、創刊号の巻頭を飾る口絵として秘蔵のヘロドタスとツキジデスとの両面塑像の写真を提供され、製版代も寄付して

くださり、その解説として執筆されたのが巻頭を飾る「希臘の二大史家」の一文である。創刊号の編輯に主としてたづさわったのは一年後輩の飯田忠純君であった。田中氏は史学科には秀才が集まるとしてホクホクであったが、飯田君も幼稚舎から生抜の秀才で、先生に私淑し史学科に進んだものであった。しかし此人不幸にして早逝せられ、大成しなかったのは残念であった。

創刊当時の「史学」の形式は、京都の「史林」に似ていると云われるが、成程その内容も赤門派の「史学雑誌」より「史林」的色彩の濃いものであった。加藤繁さんは京都の織田博士の下で「清国行政法」の編纂にたづさわっていた方であり、京都の先生方に知合いが多く、此時書信で各先生に支援を依頼されたので、京大からも入会して下さる人が多かった。

明治四三年大学改組と共に田中氏は予科主任に任せられ、大正十二年その逝去にまで及んでいる。当時慶応は理財科には福田徳三、堀江帰一などがあり、文科では永井荷風を新たに迎え、清新の気がみなぎっていた時である。予科主任として田中氏は赤門など出身の英才を多く登用している。其頃三田文科を教えた人には小宮豊隆、阿部次郎、豊島与志雄など後に知名になった人が多く、此等の人々は本科が聘した人であると思われるが中には後年文部大臣になった安倍能成の如き大正五年から十年まで予科で独語を教え、大正九年に初めて本科で哲学史を講じておる所をみると田中氏の登用されたものとみてよいであろう。同様なことは小山鞆絵、伊藤吉之助等、阿部・小宮氏等と共に後に東北大の新設文学部に馳せ参じた人々についても云えるのではなからうか。

塾の教務の中最も事件トランプが多く、治めるに難しいのは予科主任の職と目されるが、行政手腕に富む先生はよく之を乗切り、長年月に及んだのである。先生をなやましたそういう事件の一つに自分もいさかまきこまれていたので此処にその一端を記しておきたい。自分は、普通部から大正三年に大学文科の予科に進学したがその時から二ヶ年向軍治氏の独語の教え

も受けた。ドイツ語学者としてすぐれた学殖をもった先生は、一方ローマ字運動に熱心であり、その普及にとめていた。或日先生が辞職を勧告されていると聞き、氏のドイツ語をきいている他のクラス委員達と一緒にその留任運動を開始した。所がだんだん此事件が単純でないことがわかってきた。聞く所によると教員会議の席上で予科英語教科書の編纂者K氏を英語教員の広井辰太郎氏が論難し、向軍治氏また之を応援し、その結果として広井氏の罷免、向さんえの辞職勧告がなされたのだと云う。委員達は、鎌田塾長を始め、門野幾之進、林毅陸、氣賀勤重、青木徹二の諸氏を歴訪し、最後に田中先生を尋ねて向軍治氏等の留任を求めたのである。その時氏は先づ吾々に署名をさせてから、今度の処置はもう考慮の余地がないもので広井君の留任させるというなら、主任である自分の不信任を表明したまえという決然たる挨拶であった。当時歴訪した諸先生の生ぬるい態度に比べ、田中氏の明瞭な返事に吾々は却て爽快な感じをした位である。困ったのはその後広井氏が学生にストライキをおこさせようとして宣伝ビラをくばり初めたのである。吾々は向さんの弟子ではあったが、広井さんにはあまり面識なかったので、学生ストライキまで運動を発展させる勇気が出なかった。丁度その時政治科学生であった普通部以来の友達藤山愛一郎、坂本豊吉の両君が私にもう止めろと忠告してくれ、ついに此時の学生運動は不発に終わったのである。三田評論の記事によると広井氏は「大正六年三月限り退職」向氏は「同六年四月休職」となっている。皮肉なことに此事があったから自分は田中さんの第一印象が忘れられずその年の本科進学に史学科を選んだのである。(坂本豊吉、「田中先生の追憶」三田評論大正十二年三一六号参照)

私は三田演説会委員の末席につらなっていたので小沢愛囀氏にたのまれ、鳥居竜蔵博士を尋ねたことがあったが、その時氏は、田中氏を評して「慶応らしからぬ学者」と云ったことがある。同氏が「慶応らしい学者」という意味がどんなものか私にはわからないが、先生が単に西洋文化のみならず、中国文化に造詣深く、かつ単に書齋における学究的研究に終始せず、進んでその学問の成果を広く江湖に流布させようという点に力を注いだ点は福沢先生以来の流れを汲むものであ

り、此点に於て田中先生も全く三田流の学者であつたと認めなければならぬ。

先生が泰西の優れた史書を読むことを学生に絶えず勧めていたことは既に上述したが、之を邦訳して大衆を啓蒙させようといつとめられ、学校を卒業したばかりの吾々までも動員して泰西名著歴史叢書を刊行させたり、雑誌「実業」の主幹を引受けられたり、ついにその過労の爲逝去を早められたことは痛惜の念に堪えぬ所である。

今回の講演会企画には最初別に法学関係の演者が予定せられたように解釈し、自分は其方面に汎ることを避けたが、田中氏はもともと政治学に興味を抱き、多くの著書論文あり、政治文学の両科に教授を兼ね、大正八年推されて法学博士となり、十年に国家学を東京商科大学に講ぜられている。

先生の令室は旧姓吉本さつきと云われ、良妻賢母の誉高く、四男二女を挙げ、長男和雄君は慶大法学部を出、千代田生命につとめ、戦後郷里に帰られ、現在函南町長であり、次男の荆三君は文学部を出て現在慶大法学部教授で父君と同じく近世政治史を講じている。田中先生の夫人は昭和十八年五月八日に逝去せられ、夫君と共に郷里の先塋に埋葬されており其墓碑銘はもと塾文科で漢文を講じた国府種徳（犀東）氏の撰である。

（昭和四十七年二月一日 田中萃一郎先生逝去五十年記念講演）